

召

召は、殿様が「刀を持て」と言って、小姓を“よびつける”ことで、刀と口の会意形声字です。殿様は、普通「刀」と口にするだけで、小姓は殿様の前に進み出ます。この“刀”のトウという音がなまってショウになったのが“召”の音です。「行きましょう」が、幼児のまわらない口では「行きまとう」となりますが、tôとsyôとは大変通じやすい音です。t sの関係はよく覚えておいて下さい。召集(よび集める)、召使い。

招は、召が口で呼んでよびつけるのに対して、手でおいでおいでして“まねく”ことです。召が目下をよびつけるのに対して、招はお客をまねくことです。今では、召も招も、口や手に関係なく使いますが、召は目下に対し、招は自分と同等以上に対して使い分けています。招集、招待状。

詔は、人をよびつけ(召)て、命令を言いつける、という意味の字ですが、古くから天子の命令に限って使われます。

「詔勅」というのは、天子のみことのりのことです。詔書。

紹は、人をよびよせて“引き合わせる”という意味の字です。糸はむすぶものですから、“人と人とを結びつける”という意味を表わしてい

ます。「紹介(状)」というように使います。

昭は、“日の光を招き入れる”という意味の字で、“明るい”“照り輝く”という意味に使います。

照は、灬が火の燃える様を表わす部首ですので、日や火が明るく“てらす”意味に使います。「照明」は、へやを電燈で明るくすることです。また、「照合」(二つの物をてらし合わせる)、「対照」などの使い方もあります。

沼は、ショウがショウの意で、湖水の小さなものという意味の字です。“ぬま”のこと。

超は、“召に応じて走りよる”のが本義。今は「跳」と同音なので(どちらもチヨウ)、“とびこえる”こと、またこえることから転じて“すぐれている”などの意味に使われています。超越、超人、超特急。

貂は、“てん”のことです。豸は獬の所でお話したように四つ足の動物です。さて、天子の近侍の高官を「貂蟬」と呼ぶことがあります。侍臣の冠の飾りに“てん”の尾と蟬の羽とを使っていたからですが、“てん”の名前は、これを近侍の臣の冠に使っていたことから、召と蟬とで貂と名付けたものではないでしょうか。